

五月。霧島連峰の懷に抱かれたその神社は、瑞々しい新緑の匂いに包まれていた。高い杉木立が陽光をほどよく遮り、境内に敷き詰められた玉砂利の上には、木漏れ日が斑模様を描き出している。時折、サワサワと梢を揺らす風は冷涼で心地よく、五月蠅いほどの鳥のさえずりが、かえてこの場所の静寂を引き立てていた。

「よし、これで終わりかしら……」

石戸霞は、愛用の竹箒をそっと鳥居の脇に立てかけ、額に浮かんだ薄い汗を木綿の手ぬぐいでそっと拭った。

白衣に緋袴という伝統的な巫女装束。しかし、どれほど生地によとりを持たせようとも、彼女の規格外の肉体を隠し通すことは不可能だった。衣服の上からでもはっきりと主張するその胸線は、大玉スイカを二つ並べてもなお足りない圧倒的な質量を誇り、公式に「Yカップ」と称される爆乳アイドルとしての片鱗を、神聖な境内のなかでも隠しきれずにいた。

普段は原村和と共に、牛柄の過激なビキニを身にまとしてステージに立つトップアイドル「みるきー☆しすたーず」の片割れ。しかし、ひとたびステージを降りて故郷の鹿児島に戻れば、彼女はこうして実家の神社を静かに守る、おっとりとした一人の巫女に戻るのだった。

「ふふ、今日は本当に良いお天気ね。神様もご機嫌がいいみたい」

おだやかに微笑みながら社務所へ戻ろうとしたその時、静かな境内の雰囲気を一変させるような、地響きじみた足音が石段の方から聞こえてきた。

「ハァー、ハァー、ガハハハハ！ いやあ、ここの石段は毎度体に堪えるな！ だが、登りきったあとのこの空気だけは、何物にも代えがてえ！」

ドサリ、と重い足音を響かせて現れたのは、熊のようにち切れんばかりの体躯を持った中年男性だった。

頭には薄汚れた麦わら帽子を被り、首には使い古したタオル。酪農作業で限界まで日焼けした肌は赤黒く、年中太陽の下で働いていることを物語っている。丸々と膨らんだ太鼓腹はいかにも大食漢のそれだったが、半袖のシャツから覗く腕は、毎日の肉体労働によって丸太のように太く、ゴツゴツとした節くれだった巨大な手が印象的だった。

男の名は霧島権蔵。この霧島の麓で細々と牧場を営む、快活だがどこか哀愁を帯びたおじさんだった。

「あらあら、霧島さん。こんにちは。今日も相変わらず、元気なお声ね」

霞は驚く風もなく、いつも通りの柔らかな笑みを浮かべて権蔵を迎え入れた。

「おう、霞ちゃん！ いや、神社にいるときは石戸の巫女さんって呼んだ方がいいのかい？ ガハハ、まあ細かいことは気にするな！ 今日商売繁盛の神頼みに来たんだよ！」

「ええ、どちらで呼んでいただいても構わないわ。商売繁盛のご祈願ね。いつも熱心にお参りしてくださって、神様もきっと喜んでいるわよ」

「そうだといいんだがな……。ぶっちゃけ、うちの牧場も最近は生乳の価格低迷だの飼料代の高騰だので、胃がキリキリ痛む毎日だよ。神様にもいっちょ、景気よくガツンと流れを変えてもらわねえと困るんだわ！」

権蔵はそう言って笑うが、その豪快な笑い声の裏には、切実な経営難の影が見え隠れしていた。

彼は懷から五円玉を取り出すと、賽銭箱へ放り込み、大きな身体をさらに丸めるようにして、節くれだった両手を合わせてパンパンと音を立てた。神妙な面持ちでしばらく頭を下げていたが、ふと顔を上げた際、社務所の受付機の隅に置かれた小さな包みに目を留めた。

「ん？ ……なあ霞ちゃん、あの机の上にある可愛い箱はなんだい？ 『お誕生日おめでとう』なんてカードが添えてあるが……」

「あら、見つかったかったかしら」

霞は少しだけ困ったように頬に手を当て、うふふ、と上品に笑った。

「実はね、今日が私の誕生日なのよ。地元の友人たちが、今朝わざわざ届けてくれたの」

「なんだって！？ 今日が誕生日なのかい！ そいつはめでてえじゃないか！ おめでとう、霞ちゃん！」

「ありがとう、霧島さん。でも、もうお祝いされて手放しで喜ぶような年齢でもないんだけどね」

「何を言ってるんだ！ いくつになったって、生まれた日は特別に決まってるだろ！ よし、決めたぞ。いつも参拝の時に優しく声をかけてくれるお礼だ、俺からも何かお祝いをさせてくれ！」

権蔵は太い腕を組み、フンスと鼻息を荒くした。

「そんな、お気持ちだけで十分に嬉しいわよ。お気遣いなくね？」

「いやいや、霧島山麓の男が一度口にしたことを引っこ抜けるかってんだ！ ちょっと待ってる、車にとびきりのモンがあるんだ。今持ってきてやるからな！」

「あらあら……」

引き止める間もなく、権蔵は巨体に似合わぬ俊敏な動きで石段を駆け下りていってしまった。後に残された霞は、竹箒を持ったまま、ぽつんと立ち尽くす。新緑の風が、彼女の艶やかな黒髪ロングの毛先を優しく揺らした。

「本当に、嵐みたいな人ね……。でも、お気持ちはありがたく頂いておこうかしら」

それから十分ほど経った頃、再び激しい足音が響き、息を荒くした権蔵が戻ってきた。その手には、丁寧に保冷バッグで包まれた、小さな白い洋菓子店の箱が握られていた。

「ハア……ハア……！ 待たせたな！ これだ、これを受け取ってくれ！」

「まあ、わざわざ車まで戻って……。中身は、何かしら？」

「うちの牧場で今朝一番に搾った、とびきり濃厚な生乳をな、懇意にしてる麓のケーキ屋に持ち込んで特製で作らせたロールケーキだ！ 純白の生クリームがこれでもかって詰まってるぜ！」

「霧島さんの牧場の牛乳を使った、ケーキ……。それはとても贅沢ね」

霞が箱を受け取ると、保冷剤のひんやりとした冷たさと共に、箱の隙間から、驚くほど甘く芳醇なミルクの香りがふわりと鼻腔をくすぐった。とても濃厚で、胸の奥をざわつかせるような独特の甘い芳香だった。

「せっかくだから、今すぐ社務所の奥で食べてみてくれよ！ 感想が聞きたくて堪らねえんだわ！」

「ふふ、霧島さんもせっかちなんだから。じゃあ、お言葉に甘えて、お茶を淹れて早速いただくかしら。霧島さんも、一緒にどう？」

「いや、俺はここで待ってるよ。仕事の途中で作業着も汚れてるしな。霞ちゃんが美味そうに食ってくれるだけで満足だ！」

「そう？ じゃあ、少し失礼するわね」

霞は静かな足取りで社務所の奥にある控室へと向かった。

畳敷きの小さな部屋で、霞は巫女装束の袖を汚さないよう丁寧に襷掛けをした。

机の上に白い箱を置き、そっと紐を解く。

蓋を開けた瞬間、部屋の中に爆発的なミルクの香りが広がった。

「まあ……なんて綺麗な白かしら」

箱の中に鎮座していたのは、雪のように白いスポンジ生地、限界まで詰め込まれた濃密な生クリームのカールケーキだった。

霞はフォークを手に取り、そっと一切れ分を切り分ける。スポンジは驚くほどしっとりしており、フォークを押し返すような弾力がある。

クリームをたっぷりと絡め、その小さな唇へと運んだ。

「——っ！？」

口に含んだ瞬間、霞の身体を、未だかつて経験したことのない衝撃が突き抜けた。

濃厚。その一言では到底片付けられない。

口内の熱で溶けたクリームが、まるで生き物のように舌の上に広がり、喉を通り過ぎていく。

尋常ではないコクがあるのに、後味は驚くほどすっきりとしていて、しつこさが一切ない。

そして何より、その風味だった。

単なる砂糖の甘さではない。芯にあるのは、圧倒的な「乳」の存在感。

それはどこか懐かしく、包み込まれるような安心感を覚えさせると同時に、霞の豊かな身体の奥底、特にその大ぶりの双丘の芯をじわりと熱くさせるような、不思議な感覚を伴っていた。

「なに……これ……。本当に、牛乳の味なのかしら……？」

気がつけば、霞の手は止まらなくなっていた。

普段はプロポーション維持のために間食を控えている彼女だったが、このケーキの前ではそんな理性が容易く吹き飛んでしまった。

二口、三口と、夢中で白い塊を口へと運ぶ。

食べるごとに、身体の芯から体温が上昇していくような錯覚を覚える。白衣の下で、彼女の規格外のYカップの乳房が、心臓の鼓動に合わせてドクドクと熱く脈打ち始めた。

あまりの美味さと、身体の内側から湧き上がる奇妙な高揚感に、霞の白い肌はほんのりと赤みを帯び、額には再び薄い汗がにじむ。

最後の一口を飲み込んだとき、彼女は小さく「ふう……」と、甘美な吐息を漏らしていた。その息すらも、あの濃厚なミルクの香りに染まっているようだった。

「信じられないわ……。こんなに美味しいお乳が、鹿児島にあったなんて」

霞はそっと自分の胸に手を当てた。衣服の上からでも分かる、圧倒的な柔らかさ。

その中心にある彼女の乳頭は、陥没乳首という特徴ゆえに普段は身を潜めているが、今の不思議な興奮のせいか、下着の奥でピクリと小さく疼くような感覚があった。

「霧島さん……。これほどのものを作る牧場が、どうして経営難なのかしら」

霞は上気した顔を整え、ゆっくりと立ち上がった。

この素晴らしい贈りものへの感謝と、そしてそれ以上に、あの快活なおじさんが抱える「悩み」に対して、何か自分にできることはないかという、静かで強い決意が、彼女の胸の中に芽生え始めていた。

社務所の外へ出ると、権蔵がそわそわとした様子で、大きな身体を揺らしながら待っていた。

「おう、霞ちゃん！ どうだった！？ 口に合ったかい！？」

霞はいつも通りの、しかしどこか熱を孕んだおだやかな笑顔で、権蔵を見つめた。

「ええ、霧島さん。本当に素晴らしいケーキだったわ。私、生まれてからあんなに美味しいお乳の味、知らなかったもの」

「おお……！ ガハハハ！ そうか、そうか！ 良かった！ これで作らせた甲斐があったってもんだ！」

「うふふ、本当にごちそうさま。……ねえ、霧島さん。今度、私をあなたの牧場へ招待してくれないかしら？ その素晴らしいお乳を出す牛さんたちを、この目で見てみたいの」

「おう、いつでも大歓迎だ！ 汚いところだが、霞ちゃんが来てくれるなら牛たちも大喜びだぜ！」

権蔵は嬉しそうにガハハと笑い、大きな手を振って去っていった。
遠ざかるその後ろ姿を見送りながら、霞は自分の胸をもう一度、そっと包み込むように触った。衣服の下で、何かが静かに、しかし確実に動き出そうとしているのを、彼女は感じていた。

それから数日後の昼下がり。
石戸霞は、アイドル活動の合間を縫って、霧島連峰のなだらかな裾野に位置する「霧島牧場」を訪れていた。

青々とした草原が広がり、遠くには数十頭のホルスタインがのんびりと草を食んでいる。一見すると、のどかで平和な田舎の牧場風景そのものだった。しかし、敷地内に足を踏み入れた霞の鋭い観察眼は、施設の至る所に潜む「不穏な影」を見逃さなかった。
牛舎のトタン屋根は一部が錆びついて剥がれかけ、資材置き場に積まれた飼料の袋は、予算を削ったためか安価な海外製のロゴが目立つ。そして何より、すれ違う数少ない従業員たちの表情が、一様に暗く沈んでいた。

「あらあら……。お天気が良い割には、少し寂しい空気が流れているわね」

霞はトレードマークである黒髪ロングの髪を五月の風に揺らしながら、事務所と書かれた平屋の建物へと歩みを進めた。

今日の彼女は巫女装束ではなく、お気に入りの白いブラウスに、ゆったりとしたロングスカートという私服姿だった。しかし、いくら清楚な私服で包もうとも、彼女の身体の暴力的なまでの主張を抑えることはできない。ブラウスのボタンは、破裂しそうなほどに引き絞られたYカップの巨乳によって、今にも弾け飛ばんばかりに張り詰めていた。

コンコン、と木製の引き戸を軽く叩く。

「ごめんください。霧島さん、いらっしゃるかしら？」

「ん？ ……おおっ！ 霞ちゃんじゃないか！」

奥からドタドタと重々しい足音が響き、引き戸が勢いよく開いた。
現れたのは、あの日と同じ麦わら帽子を被り、日に焼けた巨体を揺らす権蔵だった。

「いやあ、本当に来てくれたんだな！ ガハハ、むさ苦しいところだが、まあ中に入ってくれ！」

「うふふ、お邪魔するわね。先日は本当に美味しいケーキをありがとう。これ、ほんの少しだけど、実家の神社のお神酒を持ってきたの。良かったら皆さまで飲んでちょうだい」

「おお、そいつはありがてえ！ 神様のお神酒ときたら、うちの経営難にも御利益がありそうだしわ！」

権蔵は手放しで喜び、節くれだった大きな手で一升瓶を受け取った。しかし、彼が「経営難」という言葉を口にした瞬間、その快活な笑顔の奥に、深い疲弊の色が滲んだのを霞は見逃さなかった。

事務所の奥にある、年季の入った応接ソファに腰を下ろす。
出された冷たい麦茶を口に含みながら、霞は本題へと切り出した。

「ねえ、霧島さん。さっき『経営難』って仰っていたけれど……やっぱり、状況はあまり良くないのかしら？」

霞の穏やかな、しかし全てを見透かすような濁りのない瞳に見つめられ、権蔵は深いため息をついた。

彼は自らの太い太ももを、ゴツゴツとした拳でギチリと叩いた。

「……隠しても仕方がねえな。最悪の状況だよ。生乳の買い取り価格は下がる一方なのに、円安のせいでエサ代や燃料費は跳ね上がるばかり。あの日、霞ちゃんに食ってもらったケーキのミルク……あれは俺が血と汗を流して、独自に配合した最高級のエサで育てた特別牛の乳なんだが……」

「ええ、本当に美味しかったわ。あの味なら、もっと高く売れてもおかしくないと思うけれど」

「そうなんだよ！ だがな、今の時代、ただ『美味しい牛乳』ってだけじゃ、大手の大量生産品に価格競争で負けちゃうんだ。消費者の目に留まる機会すらねえ。このままだと、あと数ヶ月で資金が底を突いて、この牧場も畳まなきゃならねえところまで追い詰められてるんだわ……」

権蔵の肩が、がっくりと落とされる。

毎日の酪農作業で鍛え上げられた強靱な肉体を持つ男が、目に見えない経済の波に押し潰されそうになっている。その姿は痛々しかった。

しかし、霞の表情は崩れなかった。

彼女は優しく微笑んだまま、しかしその芯のある声で、すっぱりと言い切った。

「そう……。でも、私はあのミルクの味を知っているわ。あんなに素晴らしいものが、この世から消えてしまうなんて絶対に許されない。ねえ、霧島さん。私に何か、力になれることはないかしら？」

「え……。？ 霞ちゃんが、助けてくれるってのかい？」

「ええ。どんな手を使えば経営が改善するか、衆目を集めて人を呼ぶことができるか……。二人で知恵を絞りましょう。優しいだけじゃ、大切なものは守れないものね」

霞の言葉には、巫女としての包容力と、全国大会の修羅場をくぐり抜けてきた勝負師としての「強さ」が同居していた。

本当に力になりたい、という彼女の真摯な眼差しに、権蔵は目頭を熱くした。

「霞ちゃん……。！ あんた、なんて良い子なんだ……。！」

「うふふ、お礼には及ばないわ。さあ、どうすればこの牧場に人が集まるかしら。何か、強烈なインパクトが必要よね……」

二人は腕を組み、うーん、と思案に暮れた。

鹿児島の大自然の中にある僻地の牧場だ。普通の観光牧場のような真似事をして、今さら話題にはならない。他にはない、唯一無二の「ブランド力」と、爆発的な「集客のフック」が必要だった。

「うむ、何かこう、若者が飛びつくような……。ネットでバズるような仕掛けがあればな……」

権蔵は唸りながら、何気なく目の前の霞へと視線を移した。

そして――彼の思考が、完全に停止した。

目の前で小首を傾げているのは、今をときめく爆乳アイドルユニット「みるきー☆しすたーず」の石戸霞その人である。

ブラウスの薄い生地を押し上げ、机の上に乗りそうになっているその超規格外のYカップの巨乳。牛柄のビキニを身にまとい、世の男たちを狂わせている伝説の双丘。

「牧場」「牛」「みるきー☆しすたーず」「搾乳」――。

権蔵の脳内で、バラバラだったピースが、とんでもない形でカチリと噛み合った。

「……あ、あのよ、霞ちゃん」

「なぁに、霧島さん。何か良いアイデアでも浮かんだ？」

権蔵の視線が、自分の胸元に釘付けになっていることに、霞は気づいていた。しかし、彼女は不快感を示すどころか、うふふ、と静かな圧を伴った笑みを浮かべて先を促した。

「いや、その……本当にとんでもねえ思いつきなんだが。あんたのその、アイドルとしての知名度と……その、見事な、お胸を、使わせてもらうってのは……どう、だろうか……」

「私の胸、かしら？ 具体的には、どんなことをするの？」

権蔵はごくりと唾を飲み込み、意を決して、酪農家としての、そして一人の男としての「妄想」を口にした。

「……『みるきー☆しすたーず石戸霞の、生・搾乳イベント』……だ」

事務所の空気が、一瞬で凍りついたかのように静まり返った。

「もちろん、本当にあんたから乳が出るわけじゃねえ！ 衣装の上に特製の搾乳器具をつけて、中からうちの特濃ミルクが溢れ出てくるような、そういうファンサービス、演出としてのイベントだ！ 『現役爆乳アイドルが、本物の牧場で牛になりきって搾乳される』……こんなもん、世の男どもが黙っちゃいねえ！ 日本中からファンが押し寄せるはずだ！」

権蔵は一気にまくし立てた。自分で言っておきながら、あまりの破廉恥さに顔を赤くしている。

いくら過激な衣装が売りのアイドルとはいえ、うら若き乙女に、衆人環視の中で「搾乳」の真似事をさせるなど、正気の沙汰ではない。断られて当然、怒鳴られて当然の発案だった。

しかし、霞は声を荒げることもなく、ただ静かに状況を咀嚼していた。

（搾乳イベント……。確かに、和ちゃんと一緒に衣装でファンサービスはしてきたけれど、本物の牧場でそれをやるとなれば、かなりの恥ずかしさだわね……。でも、これだけの奇策でなければ、この窮地を脱するほどの衆目は集められない……）

霞はそっと自分の胸に触れた。ブラウスの上からでも、指先が沈み込むほどの圧倒的な質量。

彼女の乳頭は生まれつきの陥没乳首。普段は人目に触れることのない、彼女の隠された秘密の場所。それを、大勢のファンの前で、搾乳器という淫らな機械を使って擬似的に暴き立てるのだ。

想像するだけで、背筋にツンと突き抜けるような、強烈な羞恥の感覚が走った。
下着の奥で、眠っていた陥没乳首が、熱を帯びて微かにコリリと硬くなるのが分かった。

「……霞ちゃん、やっぱり、ダメだよな！ 忘れてくれ！俺がどうかしてたんだわ！」

権蔵が慌てて前言を撤回しようとした、その時。

「いいえ、霧島さん」

霞は静かに首を振った。その瞳には、一切の迷いはなかった。

「その提案、受け入れるわ。やるからには、中途半端なことはしたくないもの。『みるきー☆しすたーず』の石戸霞として、あなたの牧場を救うために、全力で『搾られて』あげるわね」

「か、霞ちゃん……っ！ 本当にいいのかい！？」

「ええ。ただし、やるからには徹底的に、ね？ 覚悟を決めた私は、怖いんだから。うふふ」

おだやかな笑顔のまま、恐ろしいほどの決断を下した霞。
その胸の奥では、イベント当日への羞恥と、そしてまだ見ぬ未知の興奮への予感が、静かに火花を散らし始めていた。

イベント当日の朝。

霧島連峰の雄大な稜線が青空に映えるその麓、「霧島牧場」の周辺は、未だかつて鹿児島県が経験したことがないほどの狂熱に包まれていた。

僻地であり、最寄りの駅から車で一時間近くかかる一本道の山奥であるにもかかわらず、地平線の彼方まで続くかのような車の列が道路を完全に埋め尽くしている。全国から押し寄せた

「みるきー☆しすたーず」の熱狂的なファン、通称「みるきーず」の男たちが、入場開始を今か今かと待ちわびていた。その数は優に数千人を越え、臨時の駐車場として開放された広大な草地はまたたく間に満車となり、入り切らない人間が周辺の道に溢れ返っていた。

太陽が昇るにつれて気温も上昇し、五月の風は心地よいはずなのに、会場に渦巻く男たちの放つ熱気と汗の匂いが、周囲の空気をじっとりと熱く湿らせていく。

「ガハハハハ！ おいおい、見ろよこの人の数を！ うちの牧場が始まって以来、いや、この霧島の歴史が始まって以来の、とんでもねえ大盛況だぞ！ 駐車場の整理が追いつかねえくらいだわ！」

事務所の裏手、特別に大型トラックの荷台を改造して作られた特設ステージのバックステージで、権蔵は興奮を隠しきれない様子で太い腕を振り回していた。いつもは厳しい経営難に曇っていたその顔は、今日ばかりは文字通り太陽のように赤黒く輝いている。

「本当に……凄いわね、霧島さん。あなたの言う通り、世の男の人たちのエネルギーっていうのは、私の想像を遥かに超えていたみたいだわ」

姿を現した石戸霞は、いつもと変わらぬ穏やかな笑みを浮かべていた。しかし、その身にまとった衣装は、この大自然の牧場風景のなかで、あまりにも強烈な不調和と、暴力的なまでのエロティシズムを放っていた。

「みるきー☆しすたーず」の代名詞である、極小の牛柄ビキニ。元々、相方の原村和と共にステージに立つための過激な衣装だったが、今日はこの「本物の牧場」というシチュエーションが、その淫らさを何倍にも跳ね上げている。規格外のYカップを誇る霞の双丘は、小さな三角形の布地では到底収まりきるはずもなく、乳房の左右、そして下部からこぼれ落ちんばかりに溢れ出ている。生地の間隙から覗く肌は、透き通るように白く、柔らかい。彼女が呼吸をするたびに、その圧倒的な質量を持った胸は、ずっしりとした重みを伴って、ぶるん、ぶるんと周囲の空気を震わせるように揺れる。往年のシングルCDでさえ隠し切れない霞の乳輪を覆って隠すなど到底不可能な頼りない布地は、ぷっくりと膨らんだ乳肉よりもほんのり色濃く桜色に必死にしがみつきのながらろうじて乳首だけは人目から守っている。

衣服に隠されていた真っ白な全身の肌は、初夏の陽光を浴びて眩いほどに輝き、くびれた細い腰、そこから繋がる豊かな肉付きの太ももが、彼女がただ細いだけのアイドルではなく、豊かな母性を孕んだ極上の女性であることを証明していた。

「……霞ちゃん、本当にありがてえ。だが、本当にいいんだな？ 舞台に上がっちゃえば、もう後戻りはできねえぞ。あの男どもはみんな、あんたが『搾られる』ところを見に来たんだからな。……もちろん、ギミックの調子は万全だ。あんたの負担にならねえよう、優しく作ってある」

権蔵は、手にした特製の器具を見つめながら、少しだけ申し訳なさそうに、しかし職人としての真剣な目で言った。

今回のイベントのために用意されたのは、本物の酪農用搾乳機をベースに大改造を施した、

「人間用疑似搾乳システム」である。透明なプラスチック製のカップから伸びる長いチューブは、ステージの床下に設置された特製タンクへと繋がっており、視覚的にも、機械的にも、本物の牛の搾乳を完全に再現できるよう設計されていた。演出として、チューブの中を事前に仕込んだ霧島牧場の特濃ミルクが流れる手筈になっている。

「ええ、分かっているわ、霧島さん。私は大丈夫よ。それに、これだけの人が霧島さんの牧場を助けるために集まってくれたんだもの。神様も、今日の私のこの格好を、きっと大目に見てくださるわ。……うふふ、さあ、行きましょうか」

霞はそっと自分の胸に手を当てた。

彼女の乳頭は、生まれつきの「陥没乳首」である。普段は、その巨大な乳房の頂点で、丸い皮膚の奥へと深く身を潜めている。しかし、今、外から聞こえてくる数千人の男たちの地響きのような歓声と、これから自分がその隠された部分を機械によって暴かれ、貪られるのだという事実を自覚した瞬間、下着をつけていないビキニの奥で、陥没していたはずの乳頭が、キュウと切なく疼くような感覚があった。

「よし！ じゃあ、時間だ！ ステージへ上がってくれ、霧島牧場の『特級看板娘』！」

「ええ。——行ってくるわね」

霞は深く息を吸い込み、ゆっくりとステージへの階段を登った。

『——お待たせいたしました！ 本日のスペシャルゲスト、「みるきー☆しすたーず」、石戸霞さんの登場です！！』

権蔵の野太いアナウンスがスピーカーから響き渡った瞬間、会場を埋め尽くした男たちのボルテージは最高潮に達した。

「うおおおおおお！！ 霞さ——ん！！！」

「本物だ！ 本物の牛柄ビキニだ！！」

「デカすぎる！ なんだあの胸は！ 神かよ！！」

「霧島まで来て本当に良かった！！ 霞ちゃんを搾らせてくれ！！」

怒号のような地鳴りが牧場を揺らす。何千もの飢えた男たちの視線が、一斉に霞の白い身体へと突き刺さった。あまりの視線の熱量に、霞は一瞬だけ立ちすくみそうになったが、すぐにいつものおっとりとした、包み込むような笑みを浮かべて、ゆっくりと両手を振った。

「皆さん、こんにちは。今日は鹿児島まで、こんなに遠いところをたくさん集まってくれて本当にありがとう。霧島牧場へようこそ。……ふふ、今日の私は、この牧場の可愛い牛さんたちの仲間入りをさせてもらうの。最後まで、仲良くしてね？」

「うおおおお！ 牛！ 霞ちゃんを牛にしてくれ！！」

「搾れ！ 搾り尽くせ！！」

興奮のあまり狂乱するファンたち。カメラのフラッシュが激しく焚かれ、その白い光が霞の豊かな肉体を妖しく照らし出す。

ステージの中央には、あらかじめ、酪農用を模した頑丈な、しかしどこか淫らな木製の「搾乳台」が設置されていた。四つん過いになって、胸を突き出すための専用の台座だ。

「あらあら……ずいぶんと大きな声ね。でも、あんまり騒ぐと、牛さんたちが驚いてミルクが出なくなっちゃうわよ？ ……ふふ、それじゃあ、さっそく始めましょうか。今日の今日まで、お胸にたくさん、美味しいミルクを溜めてきたんだから……。もしみんなのせいで出なかったら、今日のおやつは抜きにしましょうか？ なんてね」

霞は穏やかな口調のまま、しかし確かな覚悟を持って、ステージの中央へと進んだ。

そして、数千人の観衆の目の前で、ゆっくりと、その豊かなお尻を突き出すようにして、搾乳台へと四つん這いになった。

「——っ……！」

会場全体が、一瞬で静まり返った。

ステージの上に設置された特設の搾乳台で、四つん這いになったまま身動きを止めている石戸霞の姿は、集まった数千人の男たちの理性を完全に破壊するに十分な破壊力を秘めていた。

七月のむせかえるような陽光が、彼女の抜けるように白い肌を容赦なく照らし出している。

四つん這いの姿勢をとったことで、ファンの目測によってYカップと判明した規格外の双丘は、重力に従ってステージの床へとだらしなく垂れ下がっていた。牛柄の小さな布地はすでにその役割を果たしておらず、押し潰された乳房の生白い肉が、左右から、そして中央の深い谷間から、溢れんばかりにこぼれ落ちている。彼女が小さく呼吸をするたびに、その巨大な白い塊はぶるん、ぶるんと重量感を伴って小刻みに揺れ、観客たちの視線を釘付けにした。

さらに、突き出されたお尻と、そこから覗く太ももの肉感が、観客たちの理性を極限まで削り取っていく。

大自然の青空の下、これ以上ないほど破廉恥な姿勢を晒しているというのに、霞の表情はどこまでも穏やかで、慈愛に満ちていた。そのギャップが、かえって男たちの興奮を異常なまでに煽り立てる。みるきーずの性欲に血走った目で見つめられるという恥辱の只中にありながら、霞の表情にはパニックや嫌悪の色は一切なかった。彼女は軽く上気した頬を緩め、潤んだ瞳で客席を見渡すと、いつもの落ち着いた、包み込むような声音でマイクに向かって囁いた。

「ふふ、皆さん、ずいぶんと元気ね。そんなに大声を出すと、牧場の本物の牛さんたちが驚いてしまうわよ？ ……でも、遠くからわざわざ私の『搾乳』を見に来てくれたんだものね。期待には、ちゃんと応えなくちゃ。さて、霧島さん、準備はいいかしら？」

「おうよ！ それじゃあ、特製搾乳器、装着だ！」

ステージに上がってきた権蔵が、酪農用の金属製アームから伸びる、特製の透明な搾乳カップを手にした。

男たちの視線が、そのカップに集中する。権蔵は霞の真っ白な太ももや腰の横を通り過ぎ、霞の背後に回り込むと、その垂れ下がった左右の巨大な乳房へと、そっとカップを近づけた。毎日の酪農で鍛えられた権蔵のゴツゴツとした大きな手が、霞の真っ白な乳房を、器具を固定するために少しだけ持ち上げる。その瞬間の、男の手の褐色と、霞の肌の白さのコントラストが、観客席から短い悲鳴のような歓声を上げさせた。

きゅぽ、きゅぽ。

湿った吸着音とともに、透明なプラスチック製のカップが、霞の左右の乳房の頂点へとぴたりと装着された。

その瞬間、最前線のファンたちから「あっ」と短い息を呑む声が上がった。カップの透明なケース越しに、彼女の胸の最大の秘密が完全に露出したからだ。

霞の乳頭は、生まれつき内部に潜り込んでいる「陥没乳首」だった。普段のステージでも決して表に出ることのなかったその半開きの人間の口のような中心部が、今、透明なプラスチックの奥で、数千人の男たちの前に完全に晒されている。

「……んっ」

霞の身体が、かすかに震えた。

「あら……冷たいわね。霧島さん、機械の準備はいいかしら？」

「おうよ！ スイッチ、オンだ！」

権蔵がステージ脇のレバーを引くと、ウーンという力強いモーターの重低音とともに、本物の搾乳機と同じ規則的な吸引圧が作動し始めた。

コト、コト、コト、コト――。

「――っ……！？ あ、は……っ！？」

次の瞬間、霞の口から、これまでの穏やかなトーンとは明らかに違う、熱を帯びた艶っぽい悲鳴が漏れ出た。

カップの内部が真空状態になり、強力なバキュームが彼女の胸の皮膚を前方へと激しく引っ張り上げる。その強烈な吸引の快感は、演出の範疇を遥かに超えていた。

機械の無慈悲な力によって、乳房の奥深くに眠っていた敏感極まりない陥没乳首が、ぐうっと外側へと強引に引きずり出されていく。皮膚が引っ張られ、これまで空気に触れたことすらなかった乳頭の芯が、真空の中で真っ赤に膨らみ、猛烈に勃起して外部へと突き出された。

ビン、と屹立した、ペットボトルキャップに迫る太さのこん太乳首が駆動音を上げる搾乳機の中でビクビクと震える。

「ひゃ、ああ……っ！ なん、これ……っ！ 吸われて、る……胸の奥が、すごく、きゅーって……っ！」

霞は四つん過いの姿勢のまま、思わず背中を弓なりに反らせた。

ステージのスピーカーが、彼女のリアルな喘ぎ声と、衣服の擦れる音を大音量で会場に響かせる。数千人の男たちは、その淫らな光景と音響に大興奮し、狂ったように拳を突き上げた。

しかし、本当の奇跡はここからだった。

権蔵が用意したギミックは、床下のタンクからダミーのミルクを流すだけの演出のはずだった。だが、透明なチューブの中に現れたのは、あらかじめ仕込まれた液体ではなかった。

あの日、権蔵の牧場の不思議なケーキを口にして以来、霞の身体の奥底では、眠っていた爆発的な母性が急速に開花していたのだ。衆人環視の羞恥と、機械による容赦のない吸引刺激が引き金となり、彼女のYカップの巨乳の奥にある乳腺が、一斉に活動を開始した。

ぽた、ぽた……ピュッ！

「おい、見る！！ 嘘だろ、本当に何か出てるぞ！？」

「チューブが白く染まっていく！！」

「カップのなかが白くなってきた！？ いや、まさか、演出だろ！？」

観客たちが目撃したのは、驚くべき光景だった。

透明なカップの先端、完全に露出して肥大した霞の乳頭の先から、驚くほど濃密で、とろみのある真白な液体——本物の「母乳」が、ドクドクと勢いよく溢れ出し始めていた。

あの日、権蔵の持ってきたケーキを食べて以来、霞の身体の中では、何かが劇的に変化していた。規格外のYカップの奥に眠っていた圧倒的な母性とその陰に隠れたマゾヒズムが、機械の規則的な吸引と、数千人の男たちに見つめられるという極限の羞恥によって、完全に覚醒してしまったのだ。

それは一般的な牛乳よりも遥かに白く輝き、ステージの周辺には、あの誕生日のケーキと同じ、脳を骨抜きにするような甘く芳醇なミルクの香りがふわりと漂い始めた。

「あ、あらあら……？ 不思議だわ……お胸の奥から、熱いものが……ドクドクって、溢れて……ああん！」

プシュー、プシュー！

規則的な機械のピストン運動に合わせて、霞の巨大な乳房は形を歪められ、根元から先端へと波打つように絞り上げられていく。そのたびに、彼女のピュアな母乳が途切れることなくほとばしり、透明なチューブを通して床下のタンクへと流れ込んでいった。

霞の陥没していた乳首は真っ赤に勃起し、完全に外部へと露出していた。その先端の無数の乳孔から、ドクドクと、本物の、牛乳よりも遥かに濃密で甘い香りを放つ母乳が幾筋も噴き出していく。チューブは霞自身の本物の母乳で満たされ、真っ白に染まっていた。

頭が真っ白になるような激しい快感の波に吞まれながらも、霞はだらしなく口元を緩め、恍惚とした笑みを浮かべていた。

「う、美味そうだ！！ 本物のミルクが出てるぞ！！」

「霞ちゃんは本物の牛だったんだ！！」

「あの匂い、ここまで漂ってくるぞ！ すげえ甘い匂いだ！！」

「なんてこった……！ ガハハハハ！！ こいつはすげえ！ 本物の母乳だ！ 霞ちゃん、あんた最高だぜ！！」

権蔵も予想外の奇跡に興奮し、ステージ上で豪快な笑い声を上げた。

霞は、頭が真っ白になるような激しい快感の波に吞まれながら、四つん這いのまま、大きく背中を反らせて喘いだ。

「ふああ……！ ああ……っ！ 私、私のお乳が……勝手に、搾られて……っ！ 私のお乳、こんなにたくさん出ているのね……んあっ！ うふふ、みんな、見てるのね……私の、搾乳される

ところ……っ！でも、これだけたくさん出れば、霧島さんの牧場も、きっと大繁盛ね……ああん！」

透明なチューブを、彼女のピュアな母乳がドクドクと流れていく。その様子は、あまりにも淫らで、神聖で、そして圧倒的だった。

大自然の青空の下、数千人の男たちの狂乱の叫びとカメラのフラッシュを浴びながら、爆乳アイドル石戸霞は搾乳台の上で、ただひたすらに機械に身を委ね、自らの豊かな乳を限界まで絞り上げられて、極上の母乳を限界まで溢れさせ続けるのだった。

公開搾乳イベントが狂乱の渦のなかで幕を閉じた直後、ステージ脇のスピーカーから、再び権蔵の野太く、地響きのような大声が響き渡った。

「ガハハハハ！皆さん、うちの看板娘の見事な搾りっぷり、とくと目に焼き付けてくれたかい！？だがな、霧島牧場のファン感謝祭はこれだけじゃ終わらねえぞ！今から裏手の特設大型テントにて、本日限りの超目玉企画——『石戸霞・直接（ダイレクト）搾乳体験会』を開催する！！先着百名限定、早い者勝ちだ！！」

「うおおおおおおおお！！」

「直接揉めるのか！？霞さんのおっぱいを！！」

「頼む、俺を選んでくれ！全財産叩いてもいい！！」

地を割るような大歓声が牧場を揺るがし、男たちが物凄い勢いで裏手のテントへと殺到し始めた。

その頃、ステージを降りてスタッフ用のガウンを羽織った霞は、少しだけ頬を染め、戸惑いの混じった眼差しで権蔵を見つめていた。黒髪ロングの髪が、驚きで微かに揺れる。霞はこの「石戸霞・直接（ダイレクト）搾乳体験会」、つまりファンが自分の胸を直接揉んでミルクを搾るというイベントの存在を、事前に一切聞かされていなかった。

「き、霧島さん……？直接搾乳体験会だなんて、そんなこと聞いていなかったわよ？流石に、ファンの人たちに直接お胸を揉まれるのは……少し、恥ずかしすぎるわ」

彼女の言う通り、いくら過激な衣装が売りの爆乳アイドルとはいえ、衆目のなかでファンに直接胸を揉ませ、母乳を搾り取らせるなど、常軌を逸している。

「す、すまねえ、霞ちゃん……っ！」

権蔵は日焼けした巨体を小さく丸め、ゴツゴツとした節くれだった両手を合わせて、実家の神社に祈る時以上の必死さで頭を下げた。

「本当にすまねえ！ だが、見てくれ、あの男どもの狂気じみた熱量を！ 今ここでさらにガツンと一番生々しいファンサービスをブチ込めば、牧場の積年の借金なんて一発で消し飛んで、V字回復間違いなしなんだわ！ この通りだ、霧島牧場の未来のために、あんたのその極上のYカップを、男どもに委ねてやってくれねえか……っ！」

権蔵の必死の懇願。牧場主としてのプライドを捨ててまで、経営を立て直そうとする男の悲壮な覚悟だった。

霞は「あらあら……」と困ったように人差し指を頬に当て、ふう、と甘い吐息を漏らした。それからテントの外に並ぶ、期待と興奮で目をキラキラと輝かせているファンたちの姿を見た。

普通なら激怒して立ち去ってもおかしくない状況だ。しかし、彼女の芯の強さは、優しい笑顔のまま、誰もが恐れるような果敢な決断を下せる部分にあった。テントの外からは、今か今かと奇跡を待ち望むファンの熱い吐息と、期待に満ちた叫びが聞こえてくる。彼らは、霞のミルクをこの手で搾するという、一生に一度の奇跡を心から待ち望んでいた。

「……ふふ、仕方ないわね。これも霧島さんの牧場を救うため、そして、あんなに遠くから私を求めて集まってくれた『みるきーず』の皆さんのためだもの。……いいわ、そのお願い、受け入れましょう」

「か、霞ちゃん……っ！ 本当にかい！？」

「ええ。今回だけ、特別よ？ ただし、やるからには中途半端な手加減はなし。うふふ。皆さんに、私の特別なお乳を、残さず綺麗に搾ってもらいましょうね」

「霞ちゃん……っ！ あんたは、本物の女神だ……っ！」

おだやかな笑みを浮かべたまま、とてつもない覚悟を決めた霞。彼女は羽織っていたガウンを脱ぎ捨て、再びあの極小の牛柄ビキニー丁になると、ゆっくりと特設テントの奥へと進んだ。

特設テントの内部は、外の喧騒から遮断され、どこか厳かで、同時に濃厚なエロティシズムが充満する特殊な空間と化していた。

中央に据えられているのは、先ほどのステージのものよりもさらに頑丈な、革張りのクッションがついた特製の「手搾り用台座」である。

霞はその台座の上に、ゆっくりと四つん過いの姿勢になった。

重力に逆えず、床に向かってだらしなく垂れ下がる巨大なYカップの双丘。小さな牛柄の布地は既に取り払われて台座の横に引っ掛けられている。たっぷりと母乳を吸い込んだ衣装からは濃密なミルクの香りが立ち上り、男たちをますます興奮させた。

先ほどのステージでの機械搾乳によって、彼女の乳腺は完全に狂わされており、すでに透明なカップが外された今も、先端の乳頭からは、ぽた……ぽた……と、純白の濃厚な母乳が、床に置かれた金属製のバケツへと滴り落ちていた。テント内には、すでに脳を狂わせるような甘く芳醇な母乳の香りが充満している。

「準備はいいわ。霧島さん、最初の方を呼んでちょうだい」

「お、おう！ よし、最初の一人目、入りな！」

テントの幕が開き、緊張で顔を真っ青にし、全身をガタガタと震わせた若い男が入ってきた。目の前で四つん這いになり、巨大なおっぱいを垂れ流している現役トップアイドルの姿を見て、男は過呼吸寸前になっている。

「あ、あ、あの……霞さん……本当に、俺なんかが、揉んでいいんですか……？」

「ええ、いいわよ。遠くから来てくれてありがとう」

霞は四つん這いの姿勢のまま、おっとりと首を傾げて微笑んだ。そして、自らの細い指先で、垂れ下がった片方の巨大な乳房を少し持ち上げ、男の方へと差し出した。

「どうぞ、怖がらないで。あなたのその手で、私のここに触ってちょうだい……」

「ひ、ひええ……失礼します……っ！」

男は意を決して、泥にまみれたような不器用な両手を、霞の抜けるように白い乳肉へと伸ばした。

ギュームッ……！

男の両手が、霞の圧倒的な柔らかさの中へと深く沈み込んでいく。

「——んあぁっ……！」

男の手が触れた瞬間、霞の口から、脳を震わせるような甘い喘ぎ声がほとばしった。
人間の指先から伝わるダイレクトな体温と圧力。それは機械の無機質な吸引とは比較にならないほど、彼女の肉体を激しく刺激した。

男が不器用に、しかし力任せにその肉塊をギュッと握りしめた瞬間、先ほどの機械刺激によって真っ赤に勃起し、完全に外部へと露出していた彼女のフル勃起乳首が、さらにパンパンに膨れ上がった。

ピュッ！ピュッ！シュー——ッ！！

「うわあああ！？出た！出ました！！霞さんのお乳だ！！」

男の指の隙間から、牛乳とは比較にならないほど濃密で、とろみのある純白の母乳が、勢いよく噴き出した。勢い余った母乳は、乳頭だけでなく乳首の側面や乳輪からも幾筋もの純白を迸らせて男の顔や服にまで飛び散り、バケツの底へとトトトと小気味よい音を立てて溜まっていく。

「あ、ああ……っ！すごいわ……あなたの手、すごく温かくて……お胸の奥が、きゅーって、痛いちゃう……っ。うふふ、上手よ、もっと奥の方から、残さず搾り出してね……っ！」

「うおおおお！霞さん最高だ！！」

男が夢中で、極上の柔らかさを誇るYカップを何度も何度も揉みしだくたびに、霞の身体は甘美な快感でビクビクと震え、大量の母乳を溢れ出させ続けた。

「はい、時間だ！次の奴、交代だ！」

権蔵の声で、一人目の男は名残惜しそうに、しかし至福の表情でテントを後にした。入れ替わりに入ってきたのは、恰幅のいい中年男性のファンだった。

「霞ちゃん！俺のことも牛泥棒にしてくれ！！」

「ええ、歓迎するわ……。さあ、私のお胸はまだまだたくさんミルクが詰まっているから、遠慮なく揉んでちょうだい……んうっ！」

次なる男のごつごつとした手が、霞のもう片方の乳房を驚掴みにする。
容赦なく揉み潰され、形をぐにゃぐにと変える白い爆乳。

「ふああ……っ！ 激しいのは嫌いじゃないけれど……ああん！ そこ、乳頭の根元をそんなに強く引っ張られたら……お乳が、止まらなくなっちゃう……っ！」

言葉通り、男が肉厚な手のひらで乳房全体を圧迫するたびに、勃起した乳首の先端にある無数の乳孔から、白濁した聖乳がシャワーのように勢いよくほとばしった。

三人目、四人目、十人目、五十人目――。

体験会が進むにつれて、テントの中の光景は、もはや神聖な神事か、あるいは底なしの淫らな祭典か、区別がつかないほどの領域に達していた。

何十人もの男たちの手によって代わる代わる揉みしだかれ、捏ねられ、絞り上げられた霞の乳房は、摩擦と興奮によってほんのりと桜色に上気していた。

生まれつきの陥没乳首だったはずの突起は、今や完全にその機能を反転させ、男たちの執拗な愛撫によって、大人の親指ほどもあるうかという大きさにまで猛烈に肥大し、ガチガチに硬化して熱を持っていた。

「はぁ、はぁ……うふ、うふふ……。次の、次の方……どうぞ……っ。お胸が、次から次へとミルクで満たされて……張って、破裂しそうなの……っ。早く、早くお乳を抜いて……っ！
あなたの手で、早く……んおっ！」

最初は恥ずかしさに震え、牧場を救うための「自己犠牲」としてこれを受け入れたはずの霞。しかし、優しいからこそ、自分を求めてくれるファンの欲望をすべて受け止めようとした結果、いつしか彼女自身が、大勢の男たちに自らの乳を委ね、搾り取られる快感の底なし沼へと、完全に嵌まり込んでしまっていた。

四つん這いの姿勢のまま、よだれを小さく垂らし、瞳を完全に潤ませて、見知らぬ男たちにおっぱいを差し出す現役トップアイドル。

男たちがその圧倒的な肉塊に触れ、握りつぶすたびに、テント内には「ギュム、ギュルル」という生々しい肉擦れの音と、もはや完全に余裕を失った霞の「んもっ お！」「おほおおお！」という獣じみた嬌声、そして「ブシュウウッ！」と勢いよく母乳が噴き出す音が絶え間なく交錯した。

床に置かれた大型のバケツは、またたく間に霞の純度百パーセントの母乳で満たされ、二杯目、三杯目へと交換されていく。そのすべてが、男たちの手によって直接搾り取られた、奇跡の結晶だった。

「ガハハハハ……凄まじいなこりゃ！ 霞ちゃん、あんたは本物の歩く乳牛、いや、霧島牧場の救世主だわ！！」

集計用のタブレットを片手に、次々と振り込まれる体験料の巨額の数字を見て、権蔵は興奮のあまり狂ったように笑った。

外の夕日が霧島連峰の向こう側へと完全に沈み、紫色の夜が訪れるまで、秘密の特設テントからは、豊満な巫女アイドルのだらしなく溺れた喘ぎ声と、純白のミルクが激しくほとばしる音が、いつまでも、いつまでも響き渡り続けたのだった。

あの狂乱のファン感謝祭から、数ヶ月が経過した。

霧島牧場を巡る状況は、文字通り「天と地」ほどに激変していた。かつて錆びついたトタン屋根が目立ち、暗い雰囲気漂っていた敷地は、今や見違えるほどに近代化され、活気に満ち溢れている。最新の酪農設備が導入され、牛舎は清潔に保たれ、従業員たちの顔には晴れやかな笑みが戻っていた。

それもすべて、あの日を境に爆発的な大ヒット商品となった、霧島牧場の新ブランド——石戸霞公認・人間用高級生乳「かすみるく」のおかげだった。

「ガハハハハ！ おい見ろよ、今月の売上表を！ 完全にV字回復、いや、過去最高の黒字を叩き出しちまったぞ！ これもあれも、全部霞ちゃんのおかげだわ！」

事務所のデスクで、権蔵は分厚い帳簿とタブレットを交互に見つめながら、太い腕を突き上げて歓喜の声を上げていた。丸々と太った太鼓腹を揺らし、日焼けした顔をクシャクシャにして笑うその姿には、かつて経営難に頭を抱えていた悲壮感など微塵もない。

「うふふ、それは本当に良かったわね、霧島さん。私も、自分の身体がこんな風に役に立って、とっても嬉しいわ」

応接ソファに腰掛けていた石戸霞は、いつもと変わらぬ穏やかな、しかしどこか以前よりも妖艶さを増した微笑みを浮かべていた。

今日の彼女は、実家の神社で身につける白衣に緋袴の巫女装束。しかし、その胸元のボリュームは、数ヶ月前とは明らかに異なっていた。

あの日以来、霞はアイドル活動と巫女の仕事の合間を縫っては、毎日のようにこの霧島牧場へと通い詰めていた。なぜなら、彼女の身体はあの日を境に、完全に「ミルクを出す身体」へと作り変えられてしまっていたからだ。

公式発表でYカップとされていた彼女の双丘は、常にたっぷりと濃厚な母乳を蓄えているため、今や一回りも二回りも大きく、重く、はち切れんばかりにパンパンに張り詰めている。衣服の上からでも、乳房の圧倒的な重量感と、歩くたびに激しく「ぶるん、ぶるん」と波打つ肉感がはっきりと見て取れた。

「それにしても、私のお胸……最近ちょっと歩くだけでも、張って痛いくらいなの。霧島さんのケーキを食べてから、本当に不思議な身体になっちゃったわね」

霞はそっと自分の胸を包み込むように触った。衣服の布地越しに、指先がずっしりとした重みに沈み込む。彼女の乳頭は生まれつきの陥没乳首だったが、今では毎日搾られ続けたせいで、下着をつけていない白衣の奥で、常にコリコリと硬く尖り、自己主張を始めていた。

「ガハハ！ 霞ちゃんのその極上のYカップが、うちの牧場の宝の山だからな！ さあ、今日も顧客たちが首を長くして『かすみるく』の出荷を待ってるんだ。さっそく、特等席へ行こうじゃねえか！」

「ええ、喜んで。……私のこのお乳で、霧島さんの牧場がもっともっと大きくなるなら……いくらでも、搾ってちょうだい」

霞は穏やかな口調のまま、しかし確かな恍惚を瞳に宿して立ち上がった。

二人は事務所の奥から繋がる、完全にリニューアルされた最新の「秘密の搾乳棟」へと向かった。

そこは、かつての薄暗い部屋とは異なり、純白のタイルで囲まれた、まるで医療機関のように清潔な空間だった。中央には、霞のためだけに作られた、最高級の革張りの「専用搾乳台」が据えられている。

霞は手慣れた手つきで襷掛けをし、巫女装束の白衣の胸元を大胆に肌脱ぎにした。

衣服が割られ、露わになったのは、もはや人間のものとは思えないほどに豊満に肥大した、純白の二つの大丘。摩擦によってほんのりとピンク色に上気した乳房の頂点では、かつては内部に引きこもっていた陥没乳首が、これから始まる刺激を予感して、すでに大人の親指ほどに赤く、ガチガチに勃起して突き出していた。

「あらあら……もう、こんなに先走りが染み出してきちゃったわ」

言葉通り、彼女が四つん這いの姿勢をとって台座に胸を預けた瞬間、勃起した乳首の先端から、ぽた、ぽた……と、牛乳よりも遥かに濃密で甘い香りを放つ、真白な母乳が滴り落ちた。

「よし、それじゃあ霞ちゃん、いくぜ！ これからも、霧島牧場をよろしく、な！」

権蔵はそう叫ぶと、日焼けした丸太のような太い腕を伸ばし、霞の巨大な乳房を、ゴツゴツとした両手で左右から思い切り「ギュウウウウッ！」と力任せに握りつぶした。

「——んおッ？！♡ おゝんッ♡♡ おゝんおオオオおおおオお！！」

霞の口から、頭の芯が痺れるような、激しく淫らな悲鳴がほとばしった。
酪農家としての容赦のない、しかし熟練した力で、パンパンに張った乳肉の根元から一気に絞り上げられる。その強烈な愛撫と圧迫は、機械による吸引を遥かに凌駕する快感を、彼女の脳へとダイレクトに叩き込んだ。

ブシュウウウッ！！！！ シューーーッ！！！！

「ガハハハハ！！ 凄え！ 凄すぎるぞ霞ちゃん！ 噴き出してやがる！！」

権蔵の手が胸を握りつぶした瞬間、霞の肥大した乳首の無数の乳孔から、純度百パーセントの濃厚な聖乳が、まるで高圧のシャワーのように、凄まじい勢いで前方へと勢いよく噴き出した。

純白の液体は放物線を描いて、用意された特大のステンレス製バケツへとドクドクと音を立てて激しく注ぎ込まれていく。あまりの勢いに、白い飛沫が権蔵の顔や、霞の美しい黒髪ロングの毛先にまで飛び散り、部屋中に脳を骨抜きにするような甘い乳の香りが充満した。

「おゝッ♡んゝ おおっ……！ 霧島、さん……っ！すごい、凄いわ……そんなに強く、握りつぶされたら……私のお胸、壊れちゃう……んほっ♡」

霞は四つん這いのまま、大きく背中を反らせ、だらしなく口元から涎の糸を垂らしながら、激しく身悶えした。お腹の底から、ジクジクとした熱い快感が全身を駆け巡る。

「ガハハ！ 壊しやしねえよ！ あんたのおっぱいは、いくら搾っても溢れてくる最高の乳牛なんだからよ！ これからもずっと、俺のために極上のミルクを搾らせてくれよな！」

「ええ……っ、ええ、喜んで……お”っ♡ 霧島さんのお願いなら……私、いくらでも、快諾……
しちゃうわ……っ！ もっと、もっと強く、私のここを……搾り尽くして……んほお” オ” オ
” ～～～ッ♡♡」

すっかり「極上の乳婦」としての喜びに調教され、蕩けきった笑顔で母乳を噴き出し続ける石戸霞。

経営難を見事に脱し、富と最高の聖乳を手に入れた権蔵の豪快な笑い声と、豊満な巫女アイドルの溺れた喘ぎ声は、新緑の霧島山麓のなかに、どこまでも、どこまでも響き渡り続けるのだった。